

《入選》

友達から学んだ人種差別

彦根総合高等学校 一年

川瀬 詩 さん

人種差別とは、人種的偏見によってある固定の人種を差別することだ。性別や年齢、言語や地域など様々な例がある。その中でも外国人差別は肌の色や目の色、文化や言語、宗教の違いなどを理由にし、いじめをしてしまうことだ。自分では差別をしているつもりがなくても、小さな言動が差別に繋がっているかもしれない。私も実際、外国人差別をしてしまったことがある。

私が中学生の頃、クラスに父の転勤で小さい時にブラジルから引っ越してきた女の子がいた。ブラジルと日本

では文化の違いが多く、一緒に学校生活を送る中で、驚く点がいくつもあった。その中でも距離感の差が目立つようになった。挨拶をする時はハグをするのが当たり前、先生や先輩にも敬語を使わないようなことからクラスで陰口が広まった。

そんな日々が続くと、彼女は学校をよく休むようになってしまった。その時、はじめて彼女の立場を考えるようになった。慣れない環境で、何を言っているかほとんど分からない言葉話す人たちに囲まれながら生活することはどれだけ難しいことなのか。彼女の今までの行動は、少しでも私たち日本人と対等になるためだと気づいた。自分にとつての「普通」と彼女にとつての「普通」にある違いを理解できていなかったことがすごく申し訳なく思った。

母国語でない言葉話すことは簡単ではない。その上、日本語は平仮名、片仮名、漢字の三つを組み合わせて使用するため、世界で一番難しい言語とされている。そんな日本語を話すために、人一倍努力していた彼女は本当にすごいと思う。カタコトでもコミュニケーションを取るために話しかけてくれたり、私たちに彼女の母国語であるポルトガル語を教えてくださいと、だんだん心を開いてくれるようになり嬉しかった。それと同時に彼女に対する陰口はなくなり、彼女はクラスのムードメーカーになった。

一人一人の意識や自分とは異なる文化、個性について理解することが差別をなくすきっかけになること。さらに、この世界には差別されている人、している人がいると

いうことをたくさんの人に知ってほしい。

人種差別がなくなつて、この世界がもっと平和に、一人でも多くの人が幸せになりますように。